∵単立寺院「浄土真宗 正現寺」　今後の青写真　暫定版∵　　文責：小池龍之介

## １.正現寺の基本

浄土真宗もまた仏教であるから、仏教の開祖・釈迦仏陀の教えが親鸞聖人の教えの中にも流れている。

自然法爾：親鸞聖人の晩年の境地に、「自然法爾（じねんほうに）」がある。「自(おの)ずから然(しか)らしむる法の爾(しるし)」というように、人をも天地自然をもすべてを包んだ自然の法則性に身をまかせて生きることにより、「我」を離れていくのである。それは、自然のままに、あるがままに、という境地にほかならない。これは、日本古来の自然観とも合致する。

　それをさまたげて我を張り、他人や天地自然との共生を難しくするのは、私たちの心にある欲望と怒りの感情である。その欲望と怒りを減らして「我」を離れ、自然の理法のままに生きてゆこうとする境地は、釈迦仏陀による「空」「無我」「縁起」の教えと矛盾せず、その境地は真言密教の「真我」の境地や禅をきわめて自我をはなれた境地とも異ならず、あらゆる仏教諸宗派が目指すところのものである。

共存：つきつめてみると、「自然法爾」の境地にいたる方法が、念仏であったり坐禅であったり真言であったりして異なるだけなのであり、それらを広く取り入れるものとする。正現寺では、親鸞聖人による「自然法爾」をこのように広くとらえたうえで基本におくことによって、仏教諸宗派をゆるやかに包括しつつ、はば広く仏教全体を実践していくことを目指したい。さらにはこれは、日本古来の自然観とも合致するがゆえに、日本古来の神道とも共存できる、包括的なものとなるであろう。

慈悲：その学びの姿勢の根幹には、自宗派を良しとし他宗派をそしるような狭い立場をとらぬ、慈悲の精神を置くものとする。仏教とは、慈悲の精神を養うことに他ならないからである。

## ２.修行・精神修養

「１」に述べた境地を体得し法力を高めておくために、寺に住む僧侶は日々、別記「正現寺僧侶規程」に基づき修行に励む。そうして自己を日々高めたうえで、壇信徒に仏教を伝えられるように努める。

## ３．法事・葬儀・法要行事

今までどおりの作法にもとづいて、葬儀・年忌法要等をおこなうものとする。ただしその目的は、死者への供養のためにお経を読み、法要をおこなうものとする。また、行事においては、浄土真宗各派の講師をはじめとして、他宗派の講師をも呼ぶものとする。

## ４．経典

法要の際には基本的に、浄土真宗の「浄土三部経」を用いる。壇信徒より希望のあった場合は、「般若心経」や原始仏典「阿含経」等をも用いる。お寺では仏教のすべての経典を研究し、用いる。

## 5. 壇信徒との交流

平素から壇信徒との意見交換をし、相互理解を深める。その上で、寺院運営に壇信徒の意見を反映していけるようにする。

## 6. 対外行事

社会への貢献事業として、寺院外部の者に対しても行事をおこない仏教を伝え、育成する。瞑想会を１～２か月に１回程度開催し、また、一週間程度の修行合宿を年に１～２回、年間行事計画で承認を受けたうえでおこなう。それにあたっては壇信徒のお参りの邪魔にならぬよう、日程を考慮する。